

松支図書館だより 11月号

平成28年11月1日

熊本県立松橋支援学校図書館発行

地震の影響で田植えさえ心配されましたが、あれから半年稲刈りの時期を迎えました。朝、黄金色の田んぼの脇の道を通り夕方には刈り入れが済んだ田んぼになにかしらほっとします。熊本地震のあと豪雨、猛暑、阿蘇の噴火と真っ向から自然と向き合ったこの半年でした。

さて、50周年記念式典が間近に迫ってきました。どこからか、テーマソングが聞こえてきます。秋に予定されていた修学旅行や体験学習、実習の合間に式典準備も粛々と進んでいるようです。当日の各学部発表に期待がふくらみます。

さて、この時期一日の温度差が著しく体調をくずしやすくなります。外出後は一人一人が、手洗いうがいをしっかり行い自分自身で健康管理を意識して欲しいものです。

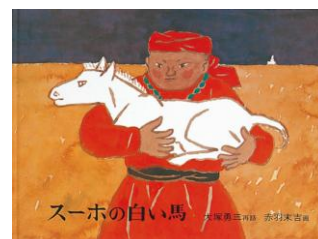
英語での読み聞かせをしました！

9月26日(月)ALTの先生による小・中学部合同の英語での読み聞かせがありました。最初は「おむすびころりん」から始まり「きんたろう」「うらしまたろう」「ももたろう」等と続けました。日本の昔話を、わかりづらい所は日本語訳をしたり、表現力豊かにユーモアたっぷり身振り手振りで行っていただきました。最初から最後まで児童生徒の皆さんは熱心に聞いていました。

だれも騒いだり泣いたりすることもなくおはなしに聞き入っていました。


専門学科や中学部で読み聞かせ！

読書週間中に専門学科で給食を食べながら、各クラスで読書タイム(読み聞かせ)をしました。初めての試みでしたが、生徒の皆さんの反応は？喜んでくれたのでしょうか？各クラス反応は、それぞれでした。が、本を読むことが苦手だなあ—と思っている皆さんにまずは絵本のもつ“ぬくもり”に触れてほしいと絵本から始めました。専門学科の生徒のみなさん、1冊は漫画ではなく、文字だけの本を読んでみませんか？(と願っているのですが・・・)25日には、中学部で行います。みなさんひとりひとりが運命の本に出会えますように・・・。



★★☆ リレーエッセイ NO 54 ☆★★

わたしと本と人生

とうとうきてしまった・・・ついにリレーエッセイの原稿依頼がまわってきたのだ。 
図書館の先生がにこやかに「あの、先生にお願いが・・・」とおっしゃられた時点ですべてを悟った。あんなにこやかな笑顔で依頼されたら断れまい。「はい、よろこんで。」居酒屋の店員が如く笑顔でわたしは依頼を引き受けた。

しかしながら、わたしのリレーエッセイなんて一体誰が興味を持つのだろうか？これを機に図書だよりの読者が減少してしまったらどうしよう・・・そんな不安しかない。そのときはもう開き直って、編集者の責任ということにしておこうか。

ここまでどうにか字数を稼いでみたがそろそろ限界なので本題にうつりたいと思う。

意外かもしれないが幼児期から小学校中学年くらいまでのわたしは本の虫であった。きっかけは3歳のときに両親がわたしに買い与えた図鑑セットであった。昆虫や動物、植物、童話や小説、科学読み物、図鑑や事典、様々なジャンルを網羅した図鑑セットが幼いわたしの一番の娯楽であった。裕福でもなかったのによく買ってくれたな、と今でも思う。今のわたしを形作っている、科学的なものの見方や論理的思考、ボキャブラリーといったものの大半はこの頃の読書によるものが大きいと思っているので両親には本当に感謝している。

また、私は子どもの頃から乗り物酔いがひどく家族での遠出にはついていかず一人で留守番することが多かった。そんなとき相手をしてくれる「友」が本であり、誰にも邪魔されずどっぷりと本の世界に浸れるので留守番をするのが楽しみであったのを覚えている。

しかしそんなわたしも大人になり、子どもが生まれ子どもに読み聞かせるようになってからは絵本や詩に関心を持つようになった。好きな絵本は「いあないばあ」や「11ぴきのねこ」シリーズ、「3びきのやぎのがらがらどん」など枚挙に暇がないが、有名な昔話や童話についてはなるべく原作どおりのものを選ぶようにしている。やはり本物だからこそ子どもたちに伝わるものがあるのではないかと思うからだ。「3びきのこぶた」も様々な出版社から出されているが、個人的には福音館書店のものが絵も可愛らしく好きだ。そんなこんなで今でも親しい人への出産祝いや誕生日祝いには絵本を贈るようにしている。

詩は大学生の時に金子みすゞさんの童謡にふれたのがきっかけである。あの有名な「わたしと小鳥とすずと」の童謡がきっかけで金子みすゞという童謡詩人に興味を持つようになり、いろいろと調べる中で「大漁」という詩に出会い、その弱きもの、小さきものへの優しくあたたかいまなざしに深く感動したのがわたしのみすゞさんファンの始まりである。

「みんなちがって、みんないい。」「みえぬけれどもあるんだよ、みえぬものでもあるんだよ。」などみすゞさんの作品には有名な言葉がたくさんある。みすゞさんの童謡からは、自然への畏敬の念やあたたかさ、優しさや喜び、時には切なさや儂さまでも感じることができる。純粋な子どものような感性で綴られたみすゞさんの童謡はこの星にあるすべてのものへの命の讃歌のようにも感じられた。喜びの中にある哀しみも、哀しみの中にある喜びも純粋な心で見つめることができる童謡詩人——金子みすゞ。作品を通じた彼女との出会いは、その後のわたしの人生に大きな影響を与えている。なんだか終盤はただの書評のようになってしまったが、わたしと本とのかかわりはざっとこんなもんだ。みすゞさんの童謡のように自分も優しく強く^{つよ}ありたいな——そう願うわたしのデスクにはいつも金子みすゞさんの童謡集が鎮座しておられる。

